

レジャー・レクリエーション指導者の社会貢献イメージ

鈴木 秀雄
(関東学院大学)

レジャー・レクリエーション（以下L/Rと略す）指導者の社会貢献イメージを描くとき、まず社会貢献とは広い意味での共同生活を営む人々の集団に対する貢献であり、狭義化すれば、特定の仲間意識を持つ人たちの集団に対する貢献でもある。それらの集団（社会）の発展・繁栄に役立つようにL/R指導者はどう働きかけるのかが社会貢献ということであろう。例えば、現代社会の中で失われつつある事柄に対しての支援も社会貢献であるし、新たな生活様式（ライフスタイル）の創造に関わることも社会貢献といえよう。もちろん、社会貢献の姿として、ミクロ・マクロとしての貢献、実際に評価として見えたり見えなかったりする可視的貢献と不可視的貢献など様々な形態が存在するであろう。このような視座からは、現代社会の諸課題を見詰め、将来を見据えていく課程の中で、L/R指導者が成しえる社会貢献の範囲(Span)と道筋(Sequence)のイメージが湧いてくる。

具体的には、諸課題（以下の☆印）を見詰めるとき、それぞれにおいてL/R指導者の社会貢献可能な領域の方向性・イメージ（以下の確固内の★印）を描いてみる事ができる：

いくつかの課題を捉えるならば：

- ☆1. 核家族化や時には孤独ともいえる一人暮らしに代表される人間関係の欠如はいたるところでコミュニケーションの問題を生じている
(★L/Rによる人間交流の促進に対する社会貢献)
- ☆2. 高齢化と共に社会参加の機会を失い人生の活躍の場が閉ざされたりしている
(★L/Rによる社会参加支援による社会貢献)
- ☆3. 競争社会による敗北感と共に強いストレス社会を産み出している
(★L/Rによる精神解放の機会提供による社会貢献)
- ☆4. 交通機関や高度機械化による身体運動量の不足を呈している
(★L/Rによる健康の維持増進に対する社会貢献)
- ☆5. 様々な個人的・社会的緊張は喜びや楽しさ、即ち、頭、体、心にオアシスを自然発生的に産み出すことができない状況を作り出している
(★L/Rによる快追求の促進=快い活動と心地好い状態の創造に対する社会貢献)
- ☆6. 人間の基礎的欲求を満たす観点からすれば、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、尊厳の欲求、自己実現の欲求に対する諸活動の積極的提供
(★L/Rによる人間性の回復効果に対する社会貢献)をイメージすることができるし、

将来（超余暇社会・超高齢社会）を見据えての生活については：

- ☆1. レジャーの三機能からすれば活動類型である、「回復型」、「発散・消費型」、「蓄積型」のバランスを保ちながら個人の生活設計に役立てる活動の取り込み
(★L/Rによるプログラム支援=好きな活動・状態を求める“カフェテリア型形態”と必要な活動・状態を求める“処方型形態”のバランスの獲得に対する社会貢献)
- ☆2. 余暇設計に関わる教育
(★余暇能力を高め余暇化を実現できる余暇学習による社会貢献)
- ☆3. 人生のステージにおいてやって来るあらゆる障害・傷病に対する受容と、それらの克服を含めたりハビリテーションと、その後に残されている能力の活用による生活援助
(★セラピューティックレクリエーションによる生活の質的向上=QOL、日常生活動作の充実=ADL、個人の生活に対する喜びの支援=EPLに対する社会貢献)

☆4. 人々が楽しむことや喜びのために行う活動それ自体を目的とする活動に対する支援
(★カフェテリア型L/Rへの支援として、本来の自立的活動の場や機会の創作と提供=RecSupportとしての社会貢献)

☆5. ある目的達成のために手段化して行う活動に対する援助
(★処方型L/Rによる援助で、作業的レクリエーション及び拘束的レクリエーションから主体的・独立的レクリエーション活動への移行に対する援助=RecCareあるいはRecAidとしての社会貢献)などがイメージできるであろう。

どのようなL/Rであろうと、整理するならば、“楽しみ(目的的レクリエーション)”と“癒し(手段的レクリエーション)”による社会貢献をイメージすることができる。

L/R指導者の社会貢献イメージは、現代社会の諸課題を見詰め、将来を見据えていく課程の中で湧出してくることを前述したが、日本におけるL/Rそのものの現状を明確に認識し、あるべき方向性とのギャップを認知できれば、その溝を埋めることができる新たなL/R指導者像(イメージ)の構築が必要となるし、少なくとも今までの指導者養成の短所・反省も共通理解するところとなり“新しい指導者育成カリキュラム”も形を鮮明にすることができる。L/R指導者による社会貢献イメージも今どうすればよいのか、そこから見えてくるはずである。

日本のL/Rの現状(課題)について:

- (1) 指導者養成からきたL/Rの技術論偏重
 - 指導するための具体的内容を必要とすることから、見える技術が中心
 - 実践活動に着目するあまり、本質にたどり着けていない
- (2) 指導者のL/Rのイメージと一般社会のL/Rのイメージとの乖離
 - 低年齢時に体験するL/Rにより将来にわたってそのイメージが固定化されている
 - L/Rは単なる遊びとしての領域となっている
- (3) L/Rの金太郎飴的発想
 - 限定化されたL/Rの部分的活動・経験にもかかわらず、残されているあるいは知らない部分も経験したものと全て同じであると錯覚している
- (4) L/Rの概念の狭さからくる認識の甘さと限定化された活動・行動
 - L/Rの概念が限定されていれば、当然認識の範囲も限られ、結果として現われてくる活動・行動も限定化されてきている
- (5) 指導者の専門性ゆえのL/Rの狭義化
 - 指導者の専門領域(指導できる得意とするところ)には、限りがあり指導できる範囲にL/Rが限定化され、狭義化が生じている
- (6) L/Rの効用と実際の価値観とのバランス・ギャップのずれ
 - ある活動によりL/Rの効用であっても、その活動自体をL/Rと認識していなければ、効用と実際の価値観との間には当然認識の異りが生じていることなどである。

指導者とは、①あるべき方向性を示すことであり、②言動の一致が求められ、③責任と努力の認識を持っていることが求められている。そして社会貢献できるL/R指導者イメージとは、①L/Rを創造する力、②L/Rを伝達できる力、③L/Rを自身のものとしても実行できている姿勢、④L/Rを自然発生的にも計画的にも遂行できる能力、⑤L/Rを生かす余暇能力(Leisurability)を持ち、⑥L/Rを産み出す余暇化(Leisurelization)が理解できていることに他ならないといえるのではなかろうか。加えて、指導者として楽しみでありカフェテリア型である“目的的活動”と癒しであり処方型である“手段的活動”の一連の理解をすることは、社会貢献を進めていく具体的活動の中で必須であることは言うまでもない。